



# ひるの星

No. 249

## もくじ

パハオラの言葉 <sup>ことば</sup> .....	2
確固不拔 <sup>かつこかぼつ</sup> .....	3
クイズ.....	11
ぬり絵 <sup>ぬりえ</sup> .....	13
工作 <sup>こうさく</sup> .....	14
みんなの写真 <sup>しゃしん</sup> .....	15
保護者のページ <sup>ほごしやのぺーじ</sup> .....	16



じだい  
「この時代こそ

ひとびと  
人々の内なる

こうざん  
鉱山から

かっこふぼっ ほうせき  
確固不拔の宝石が

あ  
明かされるべき

じだい  
時代である。」

—バハオラ

## 確固不拔

おきなわ たいふう きせつ のまさに台風の季節のころでした。きょう たいふう がっこう やす 休みにあって、子ども  
ちはとても喜んでいました。こうこう すうがく せんせい とう やす 休みにあって、お家にいる  
ことになりました。かぞく そろって たたみ へ や あつ の部屋に集まりました。そと かせ みみ  
しながら、みんな あつ の たいの 楽しい時間が始まりました。

「お話を聞くのに、もってこいの天気ね。」とモナが言いました。

「そうね、お話を聞かせて、お母さん。」とシャラがお願いしました。子ども  
期待しながらお母さんを見ました。お母さんは微笑みながら、みんなを見回しました。

「それでは、確固不拔というお話はどうかしら？」とお母さんがみんなに尋ねました。「  
かっこ…ふばつ」？どういう意味？」とアニサが尋ねました。子ども たが かお み あ  
せて、誰も答えられませんでした。

お母さんが笑って、

「それでは、まずはそのお話をしましょう。そのお話が終わったら、誰かが“かっこふば  
つ”を説明できるでしょう。

「むかし、むかし、ある島に小さい女の子が住んで  
いました。」子供とお父さんがくつろいでいると  
ころでお母さんが話し始めました。

「この話は奇妙な島の話でした。そこは、どこ





とも行き来がありませんでした。だれも何世代もこの島

を訪ねた者はなく、その島から出た者もいませんでした。

本土の人は、その島が見えるけど、その島へ行こうとし

ても船を沖にさらってしまうととても危険な潮の流れがありました。それだけでなく、誰もがその島が呪われていると知っていました。」

「やった。カッコいい。幽霊の話した。」とリアズが叫びました。

「いいえ、違うのよ。」とお母さんが笑って言いました。

「静かにして。リアズ、邪魔しないで。」とシャラが言いました。

シャラとリアズはいつもケンカばかりしています。

「幽霊なんかいないのよ。でも、その島はとてものんだか変なのよ。その島に生まれた人はみんな生まれつき目が見えないのよ。」

「あら、かわいそうに」とシャラがため息をつきました。モナと

アニサがそれに続きました。

「そこに住む人は誰も自分を可愛そうだと思っていないのよ。誰も目が見えるということ

考えたこともありませんでした。彼らにとって目が見えないのは当たり前でした。世界中の

誰もが自分たちと同じと思っていました。事実、彼らは人間というのは自分たちだけだと信

じていました。その島以外はみんな海だと思っていました。世界中、他に何もないと。」

「ワオ、それって変だな。」とアスマが言いました。



「そうなの。」お母さんは続けました。「この女の子は奇妙なこの島に住んでいたの。その子  
の名前はニーナというの。ニーナはその島の他の人よりちょっと違っていました。彼女は目  
が見えました。それからもう一人、目が見える老人がいました。この人は島の人が病気にな  
るとその病人の治療をしていました。みんなは彼を”医者”と呼んでいました。島の人は皆、  
ニーナとこの医者をとても賢いと思っていました。というのは、この二人は島の誰も  
知らないことを知っていたからでした。たとえば、遠くて聞こえないのに誰かがやって来る  
のが分かるからでした。また、誰かが失くしたものがどこにあるか、どんなに遠くてもそれ  
に触れないで、分かるからでした。島の皆は、このことがとても不思議でしたが、とても役  
に立つ力だと思いました。誰も見える力を理解できませんでした。」

「そうだね。見えるって、誰かに説明してごらんよ。出来るかな？」とアスマが言いました。

「そうよ。赤とか、青とか、緑とか、どうやって説明するのよ。」とモナが付け加えました。

子供たちみんな、一瞬その

ことを考えました。それから、

お母さんが話しを続けました。

「ニーナちゃんはこの素晴らしい”力”を持っていたけど、とてもさみしかったのよ。

というのは、物を失った人





にはどこにあるか<sup>おし</sup>教えて、<sup>みんな</sup>皆が<sup>き</sup>聞いたり、<sup>かん</sup>感じたりする<sup>まえ</sup>前に<sup>なに</sup>何

が<sup>お</sup>起きたか、<sup>おし</sup>教えてあげているのに<sup>こども</sup>子供の<sup>ひとり</sup>一人も<sup>あそ</sup>ニーナと<sup>あそ</sup>遊ん

でくれませんでした。<sup>こども</sup>子供たちは<sup>おそ</sup>ニーナを<sup>おそ</sup>恐れていました。<sup>かのじよ</sup>彼女は<sup>ふしぎ</sup>不思議な<sup>ちから</sup>”力”があっ

たので、どんなゲームでも<sup>じょうず</sup>上手にできました。<sup>ニーナ</sup>ニーナは、いつも<sup>もの</sup>物さがしに<sup>いそが</sup>忙しかっただけ

ど、<sup>ひま</sup>暇な時は<sup>おか</sup>丘に登って、<sup>うみ</sup>海を見たり、<sup>とお</sup>遠くにある<sup>ほんど</sup>本土を見たりしていました。そこに<sup>こぢ</sup>こぢ

んまりとした<sup>ちい</sup>小さな<sup>しま</sup>島を見つけました。<sup>ときどき</sup>時々、その<sup>はまべ</sup>浜辺で<sup>こども</sup>子供たちが<sup>あそ</sup>遊んでいるのを見ま

ました。ある日、<sup>ニーナ</sup>ニーナは<sup>こども</sup>子供たちが<sup>か</sup>かくれんぼを<sup>して</sup>しているのを見ている<sup>とき</sup>時、とてもおもしろ

いことに<sup>きづ</sup>気付きました。その<sup>しま</sup>島の子供たちは<sup>かのじよ</sup>彼女と同じように<sup>め</sup>目が見えたのです。ちょうど

<sup>かのじよ</sup>彼女のようでした。<sup>ニーナ</sup>ニーナはとても<sup>こうふん</sup>興奮しました。そこに行って、<sup>い</sup>皆と<sup>あそ</sup>遊びたくてたまり

ませんでした。<sup>かのじよ</sup>彼女は自分の<sup>じぶん</sup>村に<sup>むら</sup>走って<sup>はし</sup>帰って、<sup>かえ</sup>自分と同じような<sup>うみ</sup>海の<sup>む</sup>向こうの<sup>すば</sup>素晴らしい

<sup>こども</sup>子供のことを自分の<sup>じぶん</sup>家族や<sup>かぞく</sup>友達に<sup>ともだち</sup>話そうとしました。<sup>みんな</sup>皆は<sup>かのじよ</sup>彼女の<sup>こと</sup>ことを<sup>わら</sup>笑って、”ニー

ナ!”と<sup>しか</sup>叱りました。“<sup>ニーナ</sup>ニーナ、<sup>うみ</sup>海の<sup>む</sup>向こうには<sup>なに</sup>何もないんだ。ここの<sup>しま</sup>島<sup>しか</sup>しかないんだ。

<sup>じぶん</sup>自分勝手に<sup>おも</sup>そう<sup>おも</sup>思っているんじゃない。<sup>にんげん</sup>人間は<sup>わたし</sup>私たち<sup>だけ</sup>だけだよ。<sup>わたし</sup>私たちの<sup>ほか</sup>他には<sup>だれ</sup>誰も<sup>いな</sup>いないんだよ。”

「かわいそうなニーナ。さびしかっただろうに・・・。」と<sup>い</sup>シャラが<sup>い</sup>言いました。<sup>ほか</sup>他の<sup>こども</sup>子供たち<sup>も</sup>もう<sup>な</sup>なずきました。

「さて、」と<sup>かあ</sup>お母さんが<sup>はな</sup>話を<sup>つづ</sup>続けました。

「とてもおそろしいことが<sup>しま</sup>ニーナの<sup>しま</sup>島で<sup>おこ</sup>おこりました。<sup>さいしょ</sup>最初に<sup>め</sup>目の<sup>み</sup>見える<sup>ろうじん</sup>老人が<sup>おも</sup>重い<sup>びょうき</sup>病気に

なりました。その<sup>ひと</sup>人は<sup>いしゃ</sup>医者だったので、<sup>だれ</sup>だれもその<sup>いしゃ</sup>医者を<sup>ちりょう</sup>治療する人が<sup>い</sup>いませんでした。そ



れから、島の人々は皆 どんどん病気になってしまいました。回り

の皆が病気になったので、ニーナは怖 くなってきました。医者

の老人が病気になったので、誰も助ける医者がいませんでした。ま

だ、少し元気な大人が集まって、どうしたらよいか話しあいました。ニーナは皆が話しを

している所に走って行って、言いました。”海の向こうの村に行って、助けてもらいましょ

う。お医者さんがいるかもしれません。”すると、その大人たちは彼女に向かって、叫びま

した。“何を言っているんだ。そんな話には付き合っている暇はないんだ。海の向こうには

何もないんだ。死ぬしかないんだ。”ニーナは心配して、悲しくなりました。医者の老人の

ところに行って、目に涙を浮かべて、言いました。”先生、教えて。私、どうしたら良い

のかしら。海の向こうに行って、助けを求めたいの。私には向こうに村が見えるのよ。でも、

誰も私を信じてくれないのよ。みんなが正しいのかしら。本当に人間は私たちだけかしら？

私が見ているのは、本当かしら？この島にはたくさんの人がいるけど、海の向こうには何も

ないと皆が言っているの。私はほんの子供だから、私が正しくて、皆が間違っていると言

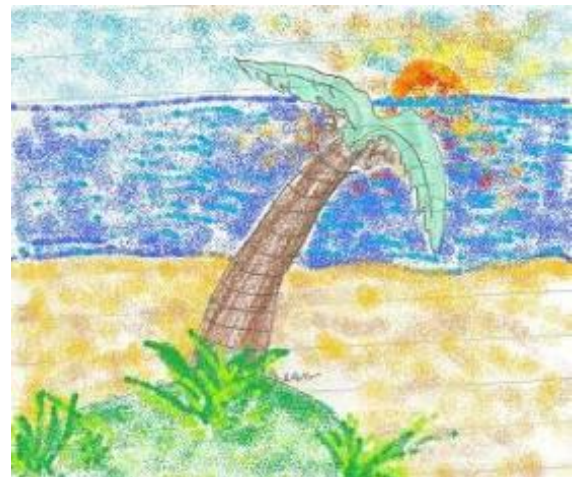
えるかしら？”医者の老人は、よしよしと彼女の手をなでて言いました。「自分の正しいと

思うことを信じなさい。誰がなんと言おうとも。島の浜辺に行きなさい。大きな木のところ

に自分が若いころに使っていた小さなカヌーがある

から、それを使いなさい。カヌーを海に浮かべる前に

海に棒きれを浮かべてごらん。その棒きれで潮の流





れを確かめなさい。昼間、ある時は一つの方向に潮は流れるし、

反対の方向に流れる時もあるんだ。棒きれが本土に向かっている

時は、海にカヌーを浮かべて潮の流れに乗って、漕ぎなさい。潮

の流れはお前を助けるでしょう。棒きれが本土から離れるような

潮の流れなら、その流れがお前をどんどん沖のほうに流してしまうだろう。さあ、行きなさい！

行って助けを求めなさい。それが出来るのはニーナお前だけだよ。」

その時、アニサは飛び上がって言いました。

「やった！行け。行け。ニーナ。」他の四人の子供たちが笑ってしまいました。

「アニサ、お前はこの話にはまってしまったな。」とリアズがからかいました。

お母さんが微笑んで、話しを続けました。

「ニーナは、浜に向かって走りました。途中で、たくさんの人が病気になっているのを見ま

した。その人たちを助けられるようにお祈りしました。浜に着いて、棒きれを見つけました。

出来るだけ遠くの海に投げ入れました。……その棒が本土から離れていくのを見て、ニ

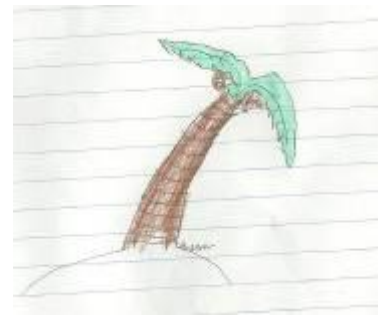
ーナはがっかりして、泣き始めました。もう一度念のためにもう一本棒を海に投げ入れまし

た。再びそれは本土から離れていきました。彼女は浜辺に座りこんで、わあわあ泣きまし

た。とうとう浜辺で、寝込んでしまいました。次の朝、目が覚めると棒きれをつかんで、海

に遠く投げ入れました。嬉しいことにその棒はまっすぐ本土に向かいました。彼女はカヌー

を引き出して、それに乗り込んで、押し出しました。その時、友達が浜辺にやって来ました。





皆、ニーナが沖に出ようとするのが分かりました。皆は出来る限りのことをして、彼女を止めようとしてきました。海に出たら、彼女はきっと死ぬだろうと言いました。

”海の向こうは死の他はなにもないよ。皆知っているように。”と皆に言いました。友だちが叫んでいるのを聞かずに、彼女はそれを振りきって、カヌーを海に押し出して、乗り込みました。カヌーにはオールがあつて、それを使いました。最初はうまく漕げなくて、カヌーはぐるぐる回ってしまいました。とうとう漕ぎ方が分かってきました。左にひとつ、右にひとつと漕いでいきました。潮の流れも本土に向かっていく彼女を手伝いました。本土の海岸に到着すると、彼女を遠く取り巻いていた皆は、不思議な島から来た女の子を見て驚きました。ニーナは自分の島の人が病気で、助けが必要だと話しました。一人の医者と他の人が、彼女の島にやって来て、手伝いました。ニーナの確固不拔の態度のおかげで、島全体が助かりました。皆が見えてないことで起きたことから、彼らを助けることができました。

お母さんの話しが終わると子供たちは拍手しました。

「さて、誰が”確固不拔”の説明ができるかしら？」とお母さんがたずねると子供たちは互

いに顔を見合わせて、また、お母さん

の方を見ました。

お母さんは微笑んで、言いました。確固

不拔はね、他の人が言うことよりも

自分が正しいと思っていることを固く



信じることなのよ。ニーナは自分が信じていることをして、他の人を助けたの。彼女は他の人が持っていない能力を自分が持っていると知っていました。他の人が止めさせようとしてもやり遂げました。」

「お母さんどうやったら、私たちが正しいと分かるの？時々、他の人に分かってもらえない時があるのに。」とモナが尋ねました。

「だから、私たちには神の顕示者がいらっしゃるのだ。」と今までずっと黙って聞いていたお父さんが付け加えました。

「この偉大な先生たちが、何が正しいかを教えてくれるんだ。この先生たちが基準だよ。正しいか、正しくないか分かるのは。」「神の顕示者の名前を言える？」とお母さんが尋ねました。

「キリスト、お釈迦さま、モーゼ、モハメッド、クリシュナ、ゾロアスター、バブ、バハオラ」と子供たちはいっせいに叫びました。お母さんが、次の言葉を教えました。

「この時代こそ、人々の内なる鉱山から確固不拔の宝石が明かされるべき時代である。」お母さんがそれを言って、一人一人のところに去了。それから皆の胸に触れて、皆の

心から宝石を取り出すようにしながら、

それを見て、微笑んで元に戻す仕草をしました。



## クイズ

1. 子供たちの学校が休みになったのは何故でしょうか？外で何が起きたのでしょうか？

---
2. お母さんのお話の中の島は何が変なののでしょうか？

---
3. ニーナが悲しくて、さびしかったのは何故でしょうか？

---
4. どんなひどいことが島で起きたのでしょうか？

---
5. 人々を助けるというニーナの考えは何だったのでしょうか？

---
6. ニーナは友達のことを聞いて本土に行くのを止めたのでしょうか？

---
7. ニーナは本土へ安全に行くのにどうしたのでしょうか？

---
8. 確固不拔とはどういう意味でしょうか？

---
9. 私たちの心の中に何を持つべきでしょうか？

---

どうでしたか？全部答えられましたか

答えは保護者のページのお話のあとにあります。





## RESPONSIBILITY

Now it is time for us to take a special journey to help us remember what we have learned so far. First, let's prepare for our journey. Close your eyes and be still. Take a deep breath, hold it, and blow it out. Do it one more time. Squeeze your arms, and let them loose. Squeeze your legs, then let them loose.

We are taking a journey to a place high on a mossy hill, where all the stepping stones change to your favorite color every time you walk on them. All the bugs turn into flowers each time you breathe on them. The moss curls under our feet like a thick green carpet. It is a magical place.

In this place, it seems we do not have to do anything for ourselves, but that is not so. Everything that happens comes from our efforts. We practice Responsibility. We know that being responsible makes us beautiful because beauty is what we do! Real beauty comes from inside. When we desire to become something beautiful ourselves, we treat other people with kindness and love and that's how we show our beauty.

This is a magical place, but in some ways, we know it is not so different from where we live. We will try to be beautiful inside and see what is beautiful in people and things all around us. We will create beauty through our own responsible actions.

Now we will look at one last butterfly, one last flower, and bring these beautiful thoughts back to our circle. When we open our eyes, we will see beauty in each of our friends and we will share beautiful smiles...

さあ、これからすてきな旅に出ましょう。先に準備をしましょう。目を閉じて。気を静めて。息をすって、はいて。もう一度すって、はいて。腕をぎゅっとして、力をぬいて。足をぎゅっとして、力をぬいて。



すてきな丘の上まで想像の中で旅をします。この丘は魔法みたいな所です。石は触るたびに自分の一番好きな色に変わったり、虫は息を吹きかけると花に変わったり。足の下の草はふわふわでとても気持ちのいい所です。

この場所は自分の為は何もしなくていいような所ですが、本当はがんばる事によってすべてが変わる所なのです。責任を取る事で自分の中からの美しさがみんなに見える事になり、他の人たちを愛と優しさであつかう事で自分はきれいな人になれます。

そこは魔法にみちた所です。でも私たちの住む場所とあまり変わりませんね。ここでも自分の中の美しさをみんなに見せる事ができます。そう、みんなの中の美しさも見つけられます。責任を通して美しさを作りましょう。

では、最後にちょうちょうをもう一羽ながめて。すてきな色ですね。この美しい思いをサークルに持って帰りましょう。目を開けて。お互いの美しさを見て自分の一番すてきな微笑みを見せましょう。

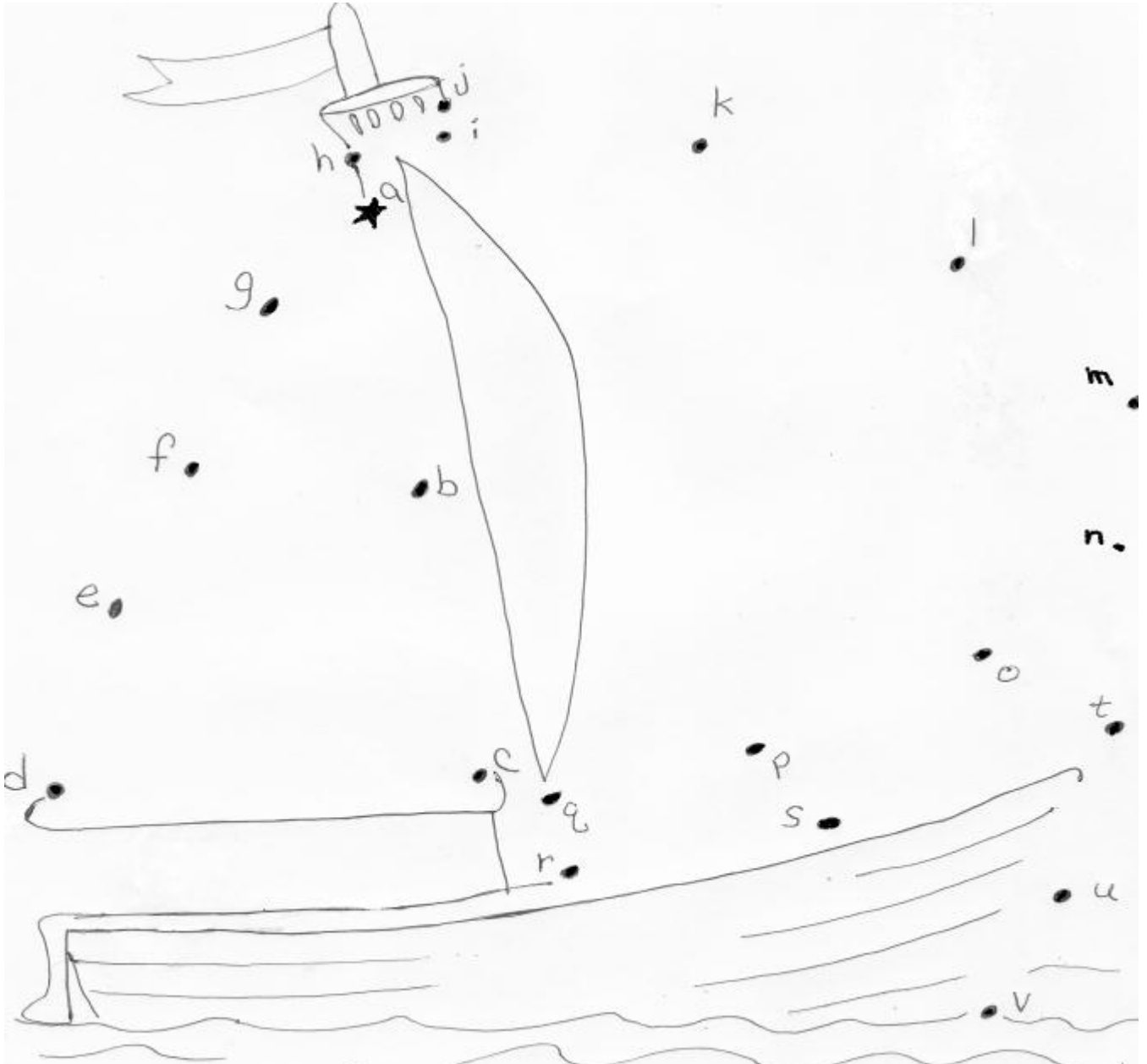
～責任～

# ぬり絵

a から b へ....

b から c へ....

てん せんぶ え かんせい  
点を全部つないで絵を完成してみましょう。



a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z

## こうさく 工作

### じゅんぴ 準備するもの

す いろ いろもぞうし まい  
好きな色の色模造紙一枚A4

アルミフویل一枚、ハートの大きさ15cm×15cm位より大きめ

はさみ、のり

ひゃくえん ほうせき そうご  
百円ショップのプラスチック宝石を数個

### つく かた 作り方

1 いろもぞうし じょうぶ かぶ ほうせき えんぴつが ふで  
色模造紙の上部または下部に2ページの引用文を鉛筆書きし、筆ペンでな  
ぞる。

2 アルミフویلを20cm位切り出し、縦半分に折る。

それをたて くらい ひと みみ かたち  
縦15cm位の人の耳の形に

き と おり た た ん で い る の を ひら  
切り取る。折りたたんでいるのを開く

は と で き あ  
とハートの出来上がり。

3 ハートをいろもぞうし  
ハートを色模造紙の上にのり付け

し、プラスチックほうせき  
し、プラスチック宝石をハートにのり

つけする。







みんなの写真





## 保護者のページ



「確固不拔」の物語のポイントは、「他の人が知覚できないことを、あなたは知覚して理解する能力がありますよ。」と子供たちに教えることです。普通の人がアインシュタインの講義の聴衆にいたら、その人はぼさぼさの髪で不格好な身なりの老人が黒板に何やら書いている位にしか理解しないでしょう。もし、そこに数学者がいたら、その人はアインシュタインの知性の素晴らしさに驚嘆して、全くその姿には目もくれないでしょう。私たちが価値あることを理解する能力があると分かっていたら、他の人がそうでないからと言って、それを私たちに影響させてはいけません。私たちの周りの多くの方は神の存在や神の顕示者についての考え方を理解しません。何かその人たちの視野を遮るベールがあって、その人たちが理解する能力がないなら、私たちが周りに対してどう行動してどのような態度を取るかは、それに影響させてはいけません。

たとえば、地上での短い時間が私たちの唯一の存在ではなく、死後の生が存在し、その未来の存在のために、この世で美德と精神性を得て、準備しなければいけないと確信しているなら、私たちの周りの人たちは、おそらく自分の家族でさえも、この考えを理解しませんが、私たちがどう生きるかは、それに影響させてはいけません。

私たちが存在する目的は人類への奉仕と、神へ近付いていくことです。もともとこれが人間の本質で本性だと私たちは理解しています。今の世界では多くの場合、これらの大切な考えを理解しようとしません。人類の未来を背負う子供たちが、これらの考えを理解して確固不拔で行動するように準備するのを手伝える責任が私たちにあります。



### クイズの答え

1) 台風が来たから。2) 皆生まれつき目が見えなかった。3) 誰も遊んでくれなかった。4) 島の人が皆病気になった。5) 本土の人々に助けを求めるという考え。6) いいえ。7) 海に棒きれを投げて潮の流れを調べた。8) 理解していることを固く信じて守る。9) 確固不拔の宝石。



皆さんのお子様のバハイ活動でみんなに役に立つ  
いいお話、又は写真などがあれば、送ってください。  
vb7mb7@bma.biglobe.ne.jp に送ってください。

## ひるの星

N o . 249

2012年3月発行

ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。

<http://www.bahaijpn.com/daystar.htm>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 F A X：03-3204-0773

ひるの星委員会：平原静志、平原ルアナ、原奈緒、エダナ・アルマンザ

## 協力

物語：平原ルアナ、

和訳：平原静志、

写真：尊田望

絵：平原潮音、平原清奈、平本かおり、アンナ・ガードナー、

ラリー・カーティス、サナ・マジズーブ、平原ルアナ、

テクニカル・アドバイザー：尊田望

監修：平野祐一